

十七歲

鼎浦子



## 「十七歳」

---

「檸檬が弾けるような日々。生きている気がした気持ち、それがすべてだ」

どこからともなく溢れてくる音が教室に控えめに響いていた。

「ねえ、何の曲聴いてるの？」

僕は目の前に無愛想に座るヘッドフォンをつけた女の子に問いかける。

正直なところ随分とがっちりとしたヘッドフォンだったため、僕の声なんか聞こえないだろうと高をくくっていたが、意外や意外に女の子はヘッドフォンを外し、振り向き、僕の方に姿勢を整えた。

「十七歳って曲知ってる？」

「いや、知らない。誰の曲？」

放課後の教室には僕ともう一人の女の子の二人だけ。束の間の間、ドキドキと音を立てる鼓動は次の一言で沈黙を余儀なくされる。

「知らないならいいや」

がっくし。

その女の子は僕が肌で感じるほどの素っ気なさを演出してみせた。嘘でも知っていると言っておけばよかった。いやでもしかし、もし知っていると言っていたら痛い目にあっていたかもしれないのも事実。

「知ってるよ」

「本当に？じゃあサビの部分歌ってみなさいよ」

みたいな感じに恥をかいていたかもしれない。こいつはそういうヤツだ。そう考えれば傷は浅くて済んだはず。そんな究極のプラス思考持って相手をしないとやられてしまうに違いない。

そんな僕の目の前にいるやつは同じクラスの綾瀬智香。もう半年以上経つのに、こうやって話しかけられるようになったのもここ数週間前ぐらいからのことだ。

綾瀬は僕から視線を外すと先ほどまでと同様の片肘をついた人生つまらなそうポーズを決め込む。体が僕の方を向いてくれたことに救いを感じるが、まるで僕がつまらないことを聞いてきたみたいな顔をして、不機嫌さが上がったことをアピールしているかのようだった。挙げ句に携帯を開き無言になる。

それは以前までの拒絶とは違い、嫌みとか皮肉りに昇格した感じだ。

綾瀬はクラスの中でも滅法顔立ちの良く、長い黒髪がよく似合っていた。しかし、驚くほど性格に難あり。それも肉眼で確認できるほどの「難」である。休み時間も放課後もヘッドフォンで耳を塞ぎ、周りの世界を遮断している。

顔立ちのせいか入学当初は積極的に話しかける人は男子からも女子からも多かったようだった。

「綾瀬さんって彼氏とかいそうだよねー？どうなのー？」

「前世ではいたんじゃない？現在進行形の私をあなたに教えないといけない理由を説明できるなら三十秒あげるからしてみなさい。できないなら妄想でもしてたらいいわ」

といった具合だったらしいが、それも半年後の現在は見る影もない。

「らしい」というのも、僕はそんなヘビーな綾瀬の存在に気づいたのが最近のことだった。いや、正確には気づいてはいたのだが、極力人間との関わりは最少にしておきたかった僕は誰とも限らず意識的に近づかないようにしていた。常人には分かるまい。

僕は入学から人間関係は無難にこなしてきたつもりだ。つもりだった。つもりになっていただけ……？

誠に不本意ながら、半年経ったところで僕も綾瀬もクラスメイトから変人のカテゴリーへと押し込められていた。

僕も綾瀬も人として浮いていたのだ。それに気づいたときには生きている心地がしなかった。「なんで私があんと同じカテゴライズなわけ？殺すわよ」、なんて今にも聞こえてきそうな鋭い視線が僕を襲う。まだ十月だというのに一瞬にして極寒が背筋を辿る。

「なっ、なに……？」

眼光を一頻り浴びさせられて弱った僕に対して、

「時野谷くん、いつまでそこに突っ立っているわけ？バカなの？」

視線と同じくらいの冷たさを感じる言葉もぶつけられてしまう始末。

「バカではないだろうよ」

「あら、そう」

綾瀬はそれ以上僕を貶すようなことは言わなかった。僕は徐に綾瀬の席のすぐ近くにある自分の席に座る。

綾瀬は普段のヘッドフォンを外し、イヤホンへと付け替える。

「難儀だわー」

「何が？」

「人生がよ。信じて救われるなら何かに縋りたいものだわ」

綾瀬は不思議ちゃん、もとい、電波さん気質だということを知ったのは本当に最近のことだ。

「まあ、そう卑屈になるなよ」

「あんたには言われたくないわよ。あー、青春なんて気持ち悪いわ。みんな高校時代になにかやらなきゃって必死すぎるのよ。高校生っていう立場にも何でも許されるって浮かれているし」

「浮いてるのは僕たちの方なんだけどな」

横槍のように言葉を飛ばしていると、綾瀬は僕を睨んで一呼吸置いて冷静さを取り戻し始める。

「まあいいわ。私には音楽があるもの」

「十七歳って曲？」

「そうよ。憧れるわー、十七歳」

「来年なれるから」

「人生いつ終わりがくるか分からないわよ。五十年後か、来年か、明日かもしれないし」

そんなことを語る綾瀬の横顔はいつも見せている表情ではなかった。席を立ち、窓から外に向かって顔を出す。

「こんな風に神様みたいに上から世界全体を覗き込めたら楽しそうだと思うわい？」

校庭の運動部を見下ろした後、振り返りながら僕に問いかける。

世界か……。そんなもんから見たら、僕らはちっぽけだよな。

爽やかな秋の風が教室を吹き抜けていき、それに合わせて綾瀬も少しだけ気持ち良さ気な顔を覗かせる。

「おまえ黄昏れるの好きだな。青春してんじゃん」

正直、罵声や拳の一発や二発が飛んでくるのは覚悟していたのだが、綾瀬は苦笑いを浮かべた。

「したいのよ、バカ」

傷ついて痛いのか？気付いてほしいのか？

前髪で隠した心を開いて、君の事に気付いてる人がきっといるだろう。一人じゃない感動を覚えたことはないか？名前を呼んで笑い合う事に意味なんていないんだ。

こうやって黒髪の君がきらりと僕の目の前に姿を現したのは数週間前からのことだ。